

## 夫は在宅ケアを希望するが、自宅で急変したらと思うと踏み切れない

相談者は、在宅で療養したいという夫の希望を叶えてあげたいが、以前、知り合いから聞いた在宅ケアでの辛い経験や急変時の対応などを考えると、不安がぬぐえないという。

### 1 相談内容 60代女性 肺がんの夫の相談

Bさん（夫）は2年前に肺がんの手術をし、半年後に再発して抗がん剤治療を受けた。胸水が溜まり、現在入院中であるが、病院からは退院して在宅ケアに移行するよう勧められている。夫は、可愛がっている犬と離れているのが淋しく、息苦しさのないようケアしてもらえたら家に帰りたいと希望している。

けれども、以前、母親を在宅で看とった知り合いが、訪問診療をしてくれる医師が臨終に間に合わず、最後につらい思いをさせたと悔やんでいた。夫の希望をかなえてあげたいのはやまやまだが、もし急変して、苦しい思いをさせたまま死なせたらと思うと、このまま入院していてくれたほうがいい。

一番つらいのは夫なのだから、夫が少しでも気分がやわらぐように、できることは何でもしてあげたいと思うが、自分も正直なところ、かなり疲れてきた。家で最期の時を過ごす夫を支えきれぬだろうか。

また、訪問診療とか訪問看護は夜中でも来てくれると病院の看護師は言っていたが、不安がぬぐえず、そのことばかりを考えている。在宅ケアが本当にできるのだろうか。

### 2 相談内容のポイント

- 1 夫の、家へ戻りたいという希望を叶えたい一方で、在宅ケアへの不安がある
- 2 特に、最期に苦しい思いをさせたくないという、妻としての想いがある
- 3 病院通いなど入院中の夫の世話や気苦勞で自身も疲れてきた

### 3 ピアサポーターの対応のポイント

- 終末期に差しかかっている夫への思いを傾聴した
- 息苦しさや痛みなどの症状への対応は、今は緩和ケアが進んでいて在宅でも可能であることを伝えた
- 訪問診療や訪問看護については、病院の退院支援の担当者や相談支援センターなどに相談すれば、実績のある確かな機関につないでくれるので、自分の不安を率直に伝えたらどうかと勧めた。
- これまで夫をよく支えられたことを労い、夫の愛犬の話などを聞いた。
- 相談者自身の疲れについて、睡眠、栄養、気持ちの切り替えなどについて話し合った。

## 4

## ピアサポートの結果

話しているうちに、今抱えている不安について、病院に相談してみる気持ちになったようである。

緩和ケアが進んでいることを知って、いくぶん不安もやわらいだようだ。

「話を聞いてもらって楽になった。また来ます」と言って帰られた。

## 5

## 対応したピアサポーターの所感

夫が在宅医療を希望し、妻もそれを叶えてあげたいが、急変の心配がある。知人の母が在宅で亡くなった話は、聴いてみると10年以上も前のことだったため、最近の在宅医療は非常に進歩していることを伝えたことで、不安が軽減されたことはよかった。

ピアサポーターのフォローアップ講座で在宅医の講義を受けたことで、ある程度の知識があったからこそできた対応だが、課題も残る。病院の相談支援センターなどに相談する時に、押さえておきたいポイントなどを伝えるべきだったのではないだろうか。また、在宅医療の資料などを見せて、具体的にイメージしてもらうことも必要だった。愛犬の話から日常生活の話題に発展し、少し焦点がずれたことで、気づきが不足した。

## 考察

## この事例から学ぶこと

在宅医療の実際について理解を深めて相談者に情報提供するとともに、患者・家族にとって望ましいケアのあり方を共に考える。

## 【ピアサポーターに必要な知識や情報】

- 在宅医療の実際について理解を深める。

医療に関する社会資源：在宅医療専門のクリニック、訪問看護ステーション、緩和ケア病棟・ホスピス  
介護保険：対象者・サービス内容の概要

## 【相談対応におけるポイント】

- 患者さん、ご家族にとって、どこで、ターミナル期を過ごすことが望ましいかを一緒に考える。

## 【講評】

心身とも疲労困憊の相談者に対しては、まずは、今のお気持ちをしっかりお聴きすることがとても大切です。愛犬のお話など、日常生活についても、丁寧に聴いていらっしやるころは大変良いと思います。また、在宅医療に関する概要を伝えたことにより、相談者の思い込みが払拭され、今後の医療機関での話し合いに向けて下準備ができたように思いました。

この事例は、在宅医療を行うことが望ましいかについて、医療者と患者さん・ご家族とが、慎重に検討しなくてはならない事例だと思えます。患者さん・ご家族の希望はもちろんのこと、肺がんの予後、医療処置、ご家族の介護力などを、総合的に判断して決めることになるでしょう。また、在宅医療＝家での看取りではなく、時期がきたら、緩和ケア病棟へ入院する方法もあります。以上のことから、ピアサポーターとしては、在宅医療の概要をお伝えし、いろいろな療養の場があるため、医療機関へご自分の不安・希望をしっかりと伝えることの大切さをお話できると良いように思いました。